

「進展無しの報告は聞き飽きた」

ホットだったがアイスコーヒーになってしまった、が大さんは美味そうに飲み干した。

カウンター越しにまりが言う。

「今かわり淹れるね」

と言った。そんなまりの声を聴いた大さんは、ありがとうと共にこの上ない喜びを表した。

「間もなく五時になる、いっぷくは夜の部に入るが大さん、居ても構わんよマキは兎も角、カナとケンジは初対面だろう話もあろう。予定が無ければゆつくりして行つて良いよ」

と次郎は言う。大さんはそうするかなと言い、カナとケンジに改めて、警視庁の捜査一課長大泉聡警部と名のつた。

「自分は元警視庁特捜隊の寺島加奈です、今はケーキ職人です、吉祥寺のアトレに店を出しています。四季を問わず海に行っていて、日焼けが取れない故いつも黒い顔しています。誰が言ったかクロヒョウです、ここではカナと呼ぶ人が多い。宜しくお願いします」

「私は柔道しか能がない、縁あってチームいっぷくのメンバーに入れて頂きました。田川健次郎です現在はガードマンです、ここではケンジで通っている宜しくお願いします」

「ケンジさん、ちゃんと自己紹介せんと遺憾よと、マキが言った」

「マキちゃん、ちゃんと言ったよ」

「そうじゃー無くて、柔道の世界チャンピオンが抜けているよ」

「おっそうかそいつか、だがわしも自分の手前味噌は至って苦手、自慢話はせん主義や」

「御免、次郎と同じ手前味噌は禁句に等しかったね」

マキはぺこりと頭を垂れた。

「どっかで見た事がある人だなと想っておった、テレビで見たんだ世界王座を奪取した時を、俺とした事が申し訳ない」

「一課長さん謝りなんぞいらんよ、皆仲間じゃー無いか」

「ここの皆さんは心が広い、わしも見習わんとな」

「大さんでいいかな、自己紹介は終わった、話題を変えようよ」

とケンジは言う。

「さっきも聞いたけど、チームいっぷくはどっから攻め込む、具体的に話せんかな」

黙り込んでいた次郎が徐に口を開いた。いっぷくに客が来ていないことを確認しマキとカナに大さんに言い始める。

「今回、捜査をしようとしている事件は殺人事件だ。大さん、いや一課長さんがおっしゃったとおり、危険も有り得る、その場合には直ぐさま引き下がる、安全が第一や、それを弁えて行動するように」

マキもカナも、毅然とした顔を見せた、次郎は更に話す。

「マキは六本木に行き六階建てのビル、そこに出入りする人の撮影だ、ここは人通りが少ない故一場所で撮影していると目立ってしまう、適度に移動しての撮影が望ましいんだが」

「一人撮影は難しいかも知れんが、車の中からと通行人を装えば可能ではと

想う」

「分かっていると想うが、ビルの六階からは、下が良く見渡せる、住人には不審がらせない事が大事やマキ、分かっているな」

キツと一文字に結んだ口でこっくりす。

「レンズは300mmズームがベターやろ、カメラとレンズはその保管庫に入って入る、確認し持って行く様に」

次郎はカナに向き直った。

「小金井市の大里麻衣の夫、一成さんが営んでいるアンティークショップへ行ってくれ、二階が住居になっている、そこには両親と子供二人と夫と暮らしている、其々に聞き込みだ、口が堅いか非協力的か、さにあらず協力的かは、行ってみなければ分からんと想うが、カナ願わくは出来る限り多くの情報を手に入れてくれ、頼んだぞ」

カナの目が、クロヒョウが獲物を狙うかの様な目つきに変わる、そしてゆっくり頷いた。

「小生は理紗にあって来る。さっき電話入れたら来週から仕事復帰と言っていた、東都地検で、菊田健斗さんはいかように仕事をしておったか、そこにいざこざはなかったか、聞いてみようと思っている。地検内に不穏な動きはなかったかも、理紗には分からんかも知れんが、聞いてみようと思っている、又何か引っ掛かりでも出てくれば占めたもんだ。北海道留萌市の飯島達郎さんや、ご家族の皆さんはその後如何しているか、警備態勢はどうなったか色々聞きたい事がある」

「留萌市の警備態勢は営利目的ではない、犯罪性も大分薄れた、ごく少人

数の態勢になったと、先日連絡が入った」

大さんが言い、尚も続ける。

「理沙さんの方も駅近に引越した、不穩めいたことも無くなった。警備も大分縮小したと聞いている」

大さんは安心めいた表情でしゃべった。

翌日の午前中、次郎は理沙のマンションのインターホンを鳴らした。

はーい、今開けると理沙の声がした。

ドアが開き理沙が言った。

「おはようございます、中に入って」

と理沙が言い、次郎が言った。

「片付は終わったかな、お邪魔します」

と、二人は会話を交わした。別に家具荷物は多くはないんだが、一度置いたらこっちの方が良いとか、置きなおしたり、余計な事ばかりやっていたんで、手間ばかり掛かって仕舞った。だけど、次郎さんではないけれど自分流に片付終わりました、どう」

「小生が、どうのこうのと言う立場ではないわんよ、理沙が良ければそれでいいんだ」

「ダイニングとリビングで三十畳はあります、食卓テーブルと四点セットのソファーを新調しました。まりさんのコーヒーには及ばないが、今淹れるからどこでもいいから座ってて」

理沙はシステムキッチンに入った。

「眺めが良いんだなー、駅方向は兎も角、それ以外は開けている。ここは高

台とも言える地形に建っている、今日は天気が悪い故、遠くが霞んでいるが、晴れていれば富士山もくっきりだよ」

次郎は、富士山が見えるであろうソファーに腰を下ろした。

「おっと遺憾、健斗さんにお線香をあげなければ」

と言い、次郎は健斗の位牌に手を合わせソファーに戻った。それを見たか理沙が、お待ちどうさまとコーヒーと牛乳ゼリーをテーブルに置いた。

「この牛乳ゼリー私が拵えました、きっと格別な味がするよ」

と言いながら、理沙もソファーに腰を下ろした。

「一昨日、両親は留萌市に帰りました。ソファーと台所のテーブルはお祝いだと買ってくれました、これ以上は買ってやらんぞと言ってたよ」

「ご両親に感謝せんとな」

「次郎さん、お言葉を返すようですが、ここの間取りでは今迄の冷蔵庫と洗濯機は不似合い、今カタログを留萌市に送った所」

一瞬、次郎はウツと発したがコツクリしながら

「良い返事が返ってくると良いね」

と一言付け加えた。

「来週から仕事復帰です、大河内係長に電話を入れました、仕事仲間の勅使河原由紀さんとも話をしました、早く出てきてよ、ここの班は男ばかり、私は淋しいよ、理沙と仕事がしたいよ、来週からが楽しみにしている」

とか言ってた。

これは少ないがチームいっぷくからの引越祝いだ、取っといってくれと次郎はテーブルに置いた。理沙は戸惑いを見せたが、頂きます。

「お会いする機会があれば、その時にも言いますが、皆さんに宜しくお伝えください」

と理沙は次郎にお礼を言った。

「さあー理沙、本題に入っていていいかな」

「言いも悪いも次郎さん任せ、どうぞ」

理沙は座りなおした。

「現在健斗さんの射殺の件は行き詰まり状態。先週、函館南署の片岡警部補から連絡が入った、次郎さんお手上げだ、先にも言ったかも知れんがマル彼はどっから来てどこへ行ったか、皆目見当すらつかん。北海道留萌市の飯島達郎さん家族及び、親族関係も営利犯罪めいた事もない。

拳銃使用による犯罪だ、マル暴を当たったが、組員に未だ分からんのか解決せんのかと笑われる始末。次郎さん、何とかしてくれと泣き言を言ってきた。小生等も、どこ迄お手伝いできるか分からんが捜査、取材と称し小生流に聞き込み等始める。その後何か引っ掛かり事はなかったか」

理沙は、コーヒーを飲みながら壁の上方を眺めた。

「あっ次郎さん、植物図鑑の間にクリアケースに入っていたA4紙に、日付けだけが記入してある用紙がありました。これです、これは何を意味すんのか、私には見当が付きません」

理沙から渡された用紙を次郎は見た、日付が十八程記入してあった。

「この字体は健斗さんの物ですね」

「はい健斗の物です」

「この記入されている日に何かがあった、それを記しんだらう。この用紙は

預かっていいかな」

「私是一向に構いません」

次郎は持っていたクリアケースにしまう。

「仕事復帰後に、違和感を覚える出来事があったら小生に知らせてくれ」

「次郎さんは地検内に何かが」

「今ん所、具体的な事は分かっていない、捜査は間口を広げる。そんな所だ」

はい、分かりましたと理沙は言った。

「健斗さんの葬儀で会ったが、秘書室長の村井瑠璃子なる人物について、知っている事を教えてくれ」

「あの人は地検内でも実力があると言うか、ナンバー2と言うか次席検事よりも、お偉い方の様に想える、下から上がって来た書類は全て秘書課経由で次席検事がハンコウを押す、それから検事正に送る」

「普通は次席検事が判を押し、検事正に上がるんだが、秘書課でワンクツシヨンあるんだな、それは何故なのか」

私には分かんないと理沙は言う。尚も理沙は言い続ける、

「優我独尊と言うか、村井秘書課長は兎に角仕事ができる、文書作成能力は超一流、下から書類が上がってきたならば一目、見れば相違点が直ぐさまに判明し、誤字脱字等相違点を訂正させる、かと思えば計算は五桁はテンキ―は不要、六桁以上はそれ相応というか、計算能力と言うか間違いは私達がテンキ―を打ち込むより正確です」

「いいか理沙深入りはせんでくれ、さっきも言った様に気付いた事だけでい

い、小生に知らせてくれ。あつと秘書課長の村井瑠璃子なる人物は」

「青森県八戸市出身と、聞いていますがそれ以上は」

「ウーム八戸、それと葬儀に秘書課長と一緒に来た弁護士の畠田智樹は」

「どのような繋がりかは分からないが月に一、二回程度来ていたみたい、来て秘書室に入って行った」

「色々ありがとう、これからの聞き込み捜査を話そう」

「私にそんな大事な事をしゃべっていいの」

「いいとも最早、理沙はチームいっぶくの同心だ、何の躊躇いごと何ぞあらん。まずは釧路空港駐車場で、薬殺害された小金井市の主婦、大里麻衣からだ。家族からの証言を取りに行く、次に六本木の六階建てビル、そこに入りする人物を当たる」

「六本木の六階建てビルって、健斗のアルバムに貼ってあったあのビル」

と理沙が言った。

「そうだそのビルだ」

と言い、次郎は理沙に言った。

「確認せし事が出てならば、すぐさまスマホを鳴らせ、いいな」

次郎の鬼デカ時代を、彷彿させるような言に理沙は大きく頷いた。ルパン三世が鳴った、週間平成記者早乙女浩二からだ、次郎ですと出た。次郎さん早乙女ですと弾んだ声がした。

「次郎さん、未確認ながら期待できる情報が手に入った」

「未確認とは言え、浩二からの情報にはデマはない、早く言ってみろ」

「鬼デカ時代の次郎節、久方振りに聞いたよ」

「褒めてんのか焦らしてんのか、早く言え」

「はい只今、あの六本木の六階建てのビルの所有者は昭和建設、オーナーは大屋隆雄、この男はくせ者で、元のビルオーナーから乗っ取ってしまった。

今調査中だが女絡みで脅し取った様だ、詳細は未だ調査中。又、建設業だが社員百人程度の企業、有利と想える事業を事細かに受注している、これも何かありそうだ。弁護士の畠田智樹三十八歳は若いが中々の英才者、昭和建設や東都地検にも顔が利く」

「そこをもっと調べてみてくれ」

「次郎さん、ここ迄調べんのも並大抵ではない、分かってください。あたり触らず私流に調査させて下さい」

「おつごめん、何時しか聞いていたら小生の目が大きくなってしまったよ」

「昭和建設は表向きは建設業だが、地上げや不動産の違法すれすれの取引、共同住宅等の立ち退きも入居者に、半ば暴力的な対応が目立っている。又同業者によると何で受注できたのか不思議がつている、言い出せばきりがない昭和建設、社長の大屋隆雄なる人物、もっと調べる必要がある」

「大さんの情報と被るもあるが有難う、今日は、マキが六本木のビルに出入りする人物の撮影に行っている、どんな人物が写っているか楽しみだ」

「えっマキちゃんがあのビルの撮影に行っている、危険はないのか」

「その辺はマキも百も承知、何ら問題なしと見ている」

「そんならいいんだが、気負付けるこした事は無い、その写真見せて下さい、重要人物が写っているやも知れん。志田やで一献傾けながら次郎さん、どうや」

「魔王が恋しか、良いだろう来るときには、電話入れてくれ用意しておく」
そんなやり取りをし、早乙女浩二と次郎の電話は終わった。

「御免、つい電話が長くなってしまった。お昼だなー何か食べに行こう、ウナギがいいかな、何時ぞや国の皆さんと食しに行った店でどうだ」

「はい、ウナギごちそうになります」

と理沙は頭をペコンと下げた。若女将のいらっしやいと粹の良い声で迎えた。理沙本来の仕草だろう、ウナギ上二つと若女将に伝える。

「理沙、健斗君の件もあろうが大分落ち着いたようだね」

「忘れてはだめと思うも、何時までも悔やんでいては、それこそだめだ、次郎さん、そう想いになります」

「そうだけど、健斗君をなくした悲しみは、小生等に分からないものがある。だけんど久し振りに会って元気な理沙を見て安心したよ、理沙たちの事は理沙に任せる」

「来週から仕事復帰だし前向きで行きます」

「前向きと言う言葉良いな」

「所で次郎さん、さつき電話で話していた昭和建設、何かやばいやり方で仕事してんの」

「ウーム、現時点では詳細は不明やがその様だ。週間平成の記者早乙女浩二によると、裏取引多分の様だ」

「昭和建設の社長、大屋隆雄さんは私には親切だったよ、センター街で路上生活している時だって、ここで寝泊まりしていると風邪ひいてしまう、マンシオンとは言えないが、ワンルームを世話してくれた、光熱費だけ払うよう

に言われる。その人がそんな悪い人とは思えない」

「理沙はその人をどの程度知っているかだ」

「最初はこのおやじ、下心があつて私をマンションにかこみ始めた、そんな風に想っていたんだが、会えば挨拶するが私には指一本触れる事は無かった。親と勉強等些細な事で喧嘩し家を飛び出した。センター街生活の始まり、そんな時声かけてくれたのが、昭和建設の大屋隆雄さんでした。親の言っていた大学は出なければいかんぞえ、そんな事を思い出し国の親の鼻を明かしてやろう、中途になっていた高校の勉強を始めた。ワンルームの光熱費と衣食と授業料はコンビニのバイトと、年を偽り夜の仕事にも従事、授業料等なんら気にする事なく、勉強に励む事も出来た。甲斐あつてか成績もトップクラスとなった。中大法学部に入学で来た、この頃より親と和解が進む、大屋社長も我が子の様に入学を祝ってくれた。大学三年の時、東都地検を受けてみないか、今の成績なら合格間違いなしと言っていた。見事、合格、北海道から両親は出てくる、社長さんに今迄のご厚意に熱くお礼し、調布市にアパートを借り東都地検通いが始まった」

次郎は理沙の話に聞き入っている。

「そこで健斗さんと知り合ったんだね」

「同期で入庁しました。当初はすれ違いざまに軽く頭を下げる程度で距離がありました、何時しかどちらともなく誘い、コーヒーや食事をするようになりました。昨年、私の誕生日間近になった日、健斗が突然私を抱きしめ結婚しようと言い出した。嬉しい事ではあるが私は躊躇した、渋谷センター街で路上生活時代を思い出した、そんな私が地検有望な人と結婚できるだろうか迷

った。即答はせず後日私から誘い、私の身の上を話しました」

頷く様に理沙の話を聞いていた次郎が話す。

「何が過去がどうのこうの、身の上がどうのこうのう、昔日だそんなの関係ないよ、今は東都地検で立派に業務を熟している、健斗さんもそう言っただろう」

「はい、そう仰いました。二人、二十九歳になった年にゴールインしました。あつごめん、私事ばかり喋っちゃいました」

「そう長くはない付き合いだが、理沙だったら何所でも通用する。所作だつて小生の知る限り満点だよ、他人が過去がどうのこうのうと、言いようはない、居たとすればその人は大間違いだ」

次郎も理沙もウナギをモグモグしながらだ。美味しく食し上手く話しが出来るだろうか、若女将が心配顔で見たい。残り三分の一位になった時ルパン三世が喚き始めた、函館南署片岡警部補からだ。

「久しぶり次郎だ、何か進展でも」

と電話に出た。

「次郎さんビックニュースだ、おっと遺憾その前にニュースはその一その二と続く、その一はそのままにしてその二から話そう。以前電話で話していた釧路警察、刑事課の大滝修二警部を知っているよな、その大滝警部とのやり取りで次郎さんの名が出て来たんだ」

「片岡警部補、すまんが今昼時だ、それに混み入っていてテーブル越しに話を聞かれんとも分からん、食し店を変える二十分したらこっちから電話を入れる、都合はどうか」

「いいとも」

と片岡警部補から帰って来た。理沙が私はと言い始めたが、次郎は制止する。

「別段、用事が無かったら一緒にいても構わんよ」

と次郎が言うと言入れずして、理沙は行くと言って来た。若女將に支払いを済ませ又来ると言い外に出る。駅に行く途中にコーヒーショップがある、そこに行こうと次郎は先を歩いた。午後一時を回った、昼が終わったのだろう、店内は六部入りと言ったところ、新たに入店客は兎も角、次郎達は、隣りテーブルが空いている席に座った。次郎と付き合い始めて数週間、僅かではあるが次郎その者が分かりかけて来た、が今迄見た事ない形相の次郎だ、そんな気に掛けている理沙を次郎は察した。

「コーヒーは何する、ケーキ食べつか」

「食べるとも」

と笑みを浮かべ声を返したら、何時もの次郎に戻っていた。

「理沙好みでオーダーしといて」

隣の席に客が来ん内に、片岡警部補に電話を入れる。

「何でも伝えたい事がその一その二とある様だ面白いね、その一とかその二とか、刑事さんは何時もそんな言い方すんの」

「いつもとは限らんが、刑事仲間ではいろんな言い方、言い回しがあるのは事実だ」

そう、理沙に言いながら次郎はガラケイをプッシュした。

「次郎さん、昼時に電話しちゃってすまん、その二からだったな、その大滝

警部なんだが、次郎さんを存じ上げていると言っている。会った事は無いが以前次郎さんが道警で講演した、その時の模様が冊子になっている、その冊子の次郎さんに興味を示していた。話のあやでわしが次郎さんに捜査協力してもらっている、何所で聞きつけたか、その次郎さんとコンタクトを取って欲しいと言って来た、一つ返事で了解と返事した。次郎さん構わんだろ」

「構わんがどこ迄協力できるか分からん」

「では、その旨連絡しとく」

「警部補、懐かしい声を聴かせる、ちよつと待ってて」

「函館南署の片岡警部補だ」

とガラケイを理沙に渡した。菊田理沙ですと名乗った。

「おっ、理沙ちゃんかへ、声から察して息災の様じゃなー、元気で何よりじやー、東京に帰って早々空き巣にやられた様だね。聞くとところによれば被害は、書類やアルバム等で金銭や貴金属は皆無と聞く、空き巣に入られてよかったは無いが、大きな被害が無くて良かった」

「でも調布署では盗難品を見た限り、健斗の射殺事件と関りがあるような事を、言っていました。二人組でしたが一人は、逮捕済みで前科付きの空き巣常習犯、あと一人は逃走経路不明もつか搜索中、この男が盗品を物色指示をしていた。その空き巣被害にあってから、次郎さんに協力をして頂き駅近に引っ越しました、来週からは仕事復帰です」

「それはそれは、おめでとうと言うかこれからの活躍を期待している」

「理沙ちゃん、わしのスマホ番号は知っているよな、話は尽きんが聞きたい事があれば、プッシュしてみてください。出られる状態であればいつでも出るよ、

すまん次郎さんに代わってくれ」

「よかった、理沙ちゃんも元気の様だ。次郎さんその一だが今朝、釧路署大滝警部から電話が入った。釧路空港駐車場毒殺事件、今まで皆目見当すらつかなかったが、有力な情報が入ったと、空港内で毒殺に使用されたとされる白のレンタカー、釧路川沿いにあるホテルの従業員が出勤途中、幣舞橋公園脇に、駐車しているのを見ている。レンタカー会社に確認した所、同レンタカーと確認、従業員によると午前七時ちよい前、待ち合わせ時間があるのか、頻りと腕時計を見ていた。一見ラフスタイル、大きめなサングラスで髪は肩より少し下ぐらい、整った容姿で中折れ帽を被っていた、今にしては珍しい光景か、タバコをふかしていた。誰とはなしに待ち合わせに良く使うこの場所、別段気にもせず通り過ぎ、ホテル業務に就くべき行き過ぎた。昨日、幣舞橋公園の掲示板に釧路警察より、白色のセダンを探していると張り紙があった。些細な事とは思うが最寄りの交番に申し出た、とホテル従業員は言っている。次郎さんどうだいこの目撃情報」

「うーむ、現段階では何とも言えん、日にちと言い時間と言い、小型漁船岸壁激突炎上と被るな、白色のセダン目撃者と、更に情報聞き取りが必要では、歳の頃は幾つぐらいとかは言っていなかったか」

「三十代半ばぐらいとか言っていた」

「場合によってはモニタージュ作成協力も、その女性が、釧路空港で殺害された、東京小金井の大里麻衣三十六歳とも限らん、彼女の写真を小金井署から、至急釧路署にFAXさせた」

次郎と片岡警部補とのそんなやり取りを、理沙はコーヒーを嗜みながら、

ホットケーキを食しながら聞いていた。そんな理沙が合いの手成如く口を挟んできた。

「次郎さんって、話には聞いていたけど凄い人なんだね、面識があるとは言え、調布署岡山警部さんを始め、函館南署の片岡警部補さん、小金井署の粕谷警部補さん達を顎で使っているみたい。今度は釧路署の大滝警部さんですか」

「そんなに偉くはないよ、万年一介の警部だった。これ以上、位は上がらなかった。で、癖と言うものは治らんよ、つい現場流に指図してしまう」

「でも相手はそれなりに指示に従っている」

「電話切った後、この野郎とでも言ってるのと違う」

「機会があつたら、調布署の岡山警部さんに確認しておきます」

「おおーい止せよ、あつもうこんな時間か、所で理沙夜は空いているか、空いているよな」

「そんな言い方されれば、空いているしか言いようがないでは」

「午後八時半ごろから、いっぷくで現役のキャビンアテンダントによる、歌謡ショーがある。来てみないか、調布署のお巡りさんも見えると想う」

「行く行くー、でも次郎さんって、人脈と言うか付き合いと言うか、幅広いんだね」

「人生七十年しとればそれは普通だよ」

「C Aと言えば飛行機乗りの女性でしょ」

「飛行機乗りは良かったな、その飛行機乗りだよ」

「国の父さんなんか、いくら頑張ったって魚市場の女性が精一杯」

「女性には変わらんよ、紀子と言うんだ紹介する」

さあー出ようかと支払いを済ませ、理沙を促し外に出た。

打ち合わせ通り、午後四時ごろにマキとカナはコーヒーショップいつぶくに相次いで戻って来た。二人とも収穫があつた様だ、表情は爽やかその者だ。マキが三百ミリのズームを取り出しテーブルに置き話し始めた。

「出勤時間を考慮し、朝七時半頃から九時頃までと昼前後、午後はブラブラしながら三時頃を撮った」

「気づかれたというか、不振がられはしなかったか」

「次郎、自分を誰だと想ってんの、チームいつぶくのマキだよ」

「おおつごめん、そうだったねで、未だお客さんが来る迄には間がある、撮った画像をあそこの液晶に映そう」

と次郎が言い終わらんうちに、マキがCFカードをノリの音響機器にセットした。

「ボケがあつたら飛ばすよ、最初にあさからの画像」

マキはリモコンで画像をスクロールし始める。

「次郎、気になる画像があつたら止めるから言って」

十五人程写っている様だ、が別に気になる人物は写っていない、それもそうだ次郎達は、ここのビルにどんな人物がいるかは分からない。次郎がポーンと膝を叩いた、

「マキいいか、これらの人物を一人ずつ数枚にして、編集してくれんか、小生等は兎も角、調布署や小金井署に持ち込めば、新たな進展があるかもしれん。あつ、昼前後のと午後の画像も一緒にだ」

「任しといて、でも、自分の中の自分が魔王が、切れかかっているといっている」

次郎はこのーと言いたげなれど、相分かったとでもいうかコックリを二回。次はカナだと言い、次郎はコーヒーを飲み干し、まりにコーヒーカップを翳した。

「自宅兼アンティークショップへ行つて来ました。ご主人の一成さんが協力的に話してくれました。一階は店舗になっている、三階は高齢と言うか一成さんの親夫婦の住まい件、倉庫なっています。二階が私達の住まいと応接室になっっています。金額は嵩むがエレベーターを付けています。で記者さんがお尋ねの話をしましょう」

「ハイお願いしますと言い、言われるまま自分は、ソファーに腰を下ろした」

「ご存じかもしれませんが、私は月の半分以上は海外に行っています。留守の日は後で紹介しますが、目利きの牧田邦夫さんに任せています、家内の麻衣は付録の様なもんですが、私の留守は帳簿付けしながら店番しています。店は午後七時までですが、麻衣は子供と両親がいるんで六時に上り夕飯作りを始めます。八時には片付は終わり、後は自分の時間と言ひ出かけたり好きな事をやっています」

「好きな事とはどんな事ですか」

「私も閉店後はそうですが、専らパソコンに向かっています、パソコンは個々に持っています」

「麻衣さんは、どんなサイトを見ているんですか」

「洋服とかブランド品とか、他に何か開いているようですが、互い干渉はしないといい、私は詳しくは分からない、最も見ても分からないのが多い、私はアンティークの売り買い、競売物を見、時には入札も行っています。それを麻衣は、見ても分からないの一点張り、そんな訳で個々のパソコンは、見ないようにしています」

「で、麻衣さんは、夕飯後自分の時間と言っているようですが、その時間どのような事をしているか」

「子ども二人は父、恒夫と母洋子に懐いていて両親と共に、三階に上がってしまします。麻衣はブランド物のバックを大事そうに持ち、行ってきたーすと出かけていた」

「何時に帰るとか、何所に行きとかは聞かないのですか」

「聞いても分からない、行きあたりばったりと返って来るだけ」

「出かけるのは毎日でしょうか」

「私の在宅時は二日ないし三日に一遍です、海外出張中は分からない、父恒夫夫婦に聞いてみてください。だけど階は違うしどこまで覚えているかは不明ですよ」

「朝飯とお昼は如何なさっていましたか」

「あくる日に帰ってくる事もありました、私の知る限りは泊はなかった、だけど午前三時頃ガタゴトするんで、アレツと想い、寝ぼけ眼で暗闇を見てみると、スケスケネグリジェ姿にTバックでお邪魔しますだって、あっ、カナさんには、セクハラ気味な言い方でしたねごめんなさい」

「取材です、自分には構いません、番度そうでしたか」

「番度ではなかった、十日に一遍位だったと想います、骨董品はよく覚えて
いるんですが」

「では、それ以外の日は、いつ帰ってかは分からないのですか」

「はいそうです、でも先にも言ったと思いますが、朝六時には朝飯の準備を
始めます」

「出かけない日は、どのような生活をしていましたか」

「午後六時に仕事を終わらせ、晩御飯づくりです。後片付けを子ども達に手
伝わせる。後は親達とテレビを見ながら雑談。子どもは九時頃にはベットに
入る、十一時に麻衣さんは二階に降り自分の部屋に入る。後は何やっていた
かは不明、だけど関心にきちんと、午前六時には朝飯作りを始める。親達に
も私にも良き嫁さん出した」

カナは慣れたもんで一字一句手帖にメモった。

で、行く先々でどんな人達と会っていたかは、気にはなさらなかった」

「行ったもんを気にするなんて私の性には合わん、麻衣を信じていた。それ
が今回毒殺であつたとは信じがたい」

「自分達は、麻衣さん毒殺究明と真実究明に立ち上がりました。どんな事で
もいい、話してください」

「私は誘われるまま、麻衣の行く先々の店に行った事がある。居酒屋風店を
三軒、カラオケ店を二件連れていかれた、何所の店も顔パスか混んでいても
従業員出入り口より入り、席に着く事が出来た。夫と言えども男連れだ、辺
りを気にしつつ席に着いた。アルコールが回り始めると顔が広いというか数
人が麻衣と声を掛け来た、ごめんねー今日はと言ひ断った、相手も分かった

もんで、グラスを翳しカンパイと言って自席に着く」

「その時の名は言っていなかった、憶えて居たら教えて」

とカナが言った。一成はこの店あの店等、人名を七人をあげた、カナはメモった。

「あの店この店、だいたいその日のうちに帰宅した、言うまでもない私が一緒にで安心したのか呑み過ぎたのか、ふらつき気味。帰宅しベットにボタン、夜具に着替えさすにも一苦勞、そんな夜もありました」

「麻衣さんは、アルコールは強い方か、弱いか一人で出かけた時はどうでした」

「程々だと想います。私と一緒に以外はシャキツとし、美味しい酒を飲んできたという顔をしていました」

カナは慣れぬスーツが気になるか、頻りと足を組み返し、メモリながら話に聞き入っている。今までの話に、一区切りつけるが如き頷き、質問を変えた。

「一成さんは、麻衣さんとの出会いはどうだったか」

一成は、その質問に対し今回の毒殺と関係があるのかと、言いたげな表情だ。

自分達は何気ない事、些細な事でも真相究明に繋がっている、そう信じお聞きしています、お話しください」

一成はウームと天井見、大きく息を吐いた。

「十二年前になるかな、建設業で骨董品が好きな社長さんが居りました。西洋の応接セットや名だたる絵画、置物を購入して頂いています。その社長さ

んが二十歳代の女性を連れ来店、品定めか店内をウロウロし始めた。私も一緒に回り説明をしました、百年ほど前のコーヒーカップセットが気に入り購入、店内奥のテーブルで売り買いを始めた。無事終了しコーヒーを飲みながら雑談と相成った。

連れて来た女性が私を伏し目がちながらチラ、チラツと私を見ている、そんな矢先、大里さんと社長さんが声を掛けて来た。この娘はわしん所で働いている大久保麻衣です、わしはお節介焼きと言うか世話好きだ、大里さん、どうだね貰ってもらえんかな、学歴は某大学を出ている、接客や経理はわしが保証すると言いました」

「いい話ではないか、男二人で店番しているより女性が入れば、更に店は明るくなるし、店番も三人でやれば余裕が出来ようというものです」

「暫く考える時をくださいと言いました」

「で、その後は」

「一週間が過ぎた頃、大久保麻衣さんから電話が入りました、ランチでもいかがですかと」

「返事は何と言いました」

「翌日のお昼を、吉祥寺のレストランで摂りました、私も三十路を過ぎていた、そろそろとは想っていた。私はしどろもどろも度々でしたが、大久保さんは、会社で接客しただけあって会話も上手、話題は尽きないでした。その日は再開を交わし、レストランを出ました」

「その後が聞きたい」

「使用人の牧田さんも、良い娘さんじゃないですか、大里さんもここいら

で身を固めたらいかげすかきたんだ。両親は健在で大学生の妹がいる。身元は確かだ、三か月付き合い結婚しました。そして今日です」

カナは一呼吸おいて聞いた。

「その建設会社名と、社長さんの名前は何と言います」

「六本木にある六階建てのビルで、その二階三階にあります、昭和建設と言
い、社長さんの名は大屋隆雄さんです」

聞いていたカナは、大里さんに気付かれんよう、気の高ぶり抑えるのに必
死だ。無理もない、六本木のビル、予てから捜査拠点になっているビルだ、
然もそのビルに入居している昭和建設、そこで事務員をしていた大里麻衣、
一成さんの話を聞きながら麻衣さんと、毒殺との関連等々カナの頭ん中は飽
和状態。カナは深呼吸し質問した。

「いつ頃から夜出かける様になったと」

「子どもが手にかからぬと言うか、下が小学校に入ったところからだと思う、
ジジババが面倒見がいい、孫たちの面倒は私達に任せときな、そう言ってい
ました、私達も互い息抜きも必要だ、家庭を疎かにしない限り互いの行動は
束縛しないと決めました。私は買い付けやらオークション等留守がちが多く
なった、その時は店を家庭を麻衣は守ってくれました。その頃からだと想う
夜、出かけるようになったのは」

「麻衣さんのご両親は如何なさっています」

「悲しさ多分なれど、私と一緒に釧路に行って遺体を引き取りました。今は
幾分元気を取り戻したようです、両親達は其々に仕事しています、明日、雑
用がてらここに来ます、宜しかったらご一緒に」

「自分の様なもんが居たんでは」

「淋しさ多分なれど、二人とも明るくざつくばらんです。ご一緒にどうぞ」

「では、明日宜しくお願いします」

とカナは言い、アンテークショップを出た。着成れしぬスーツに戸惑い気味で、疲れたかカナはいつぶくの開き戸に凭れながら、只今と中に入っている。マキはすでに戻っている、次郎と撮って来た写真をみながら談義中。お帰りとまりが声を掛けた、それにつられて、次郎とマキがお帰りと言った。

「マキ、そっちの収穫はどうだった、こっちは偉い事実が判明したよ」

ええーッといった表情で次郎はカナを見た。

「先ずはマキの方はどうだったか教えて」

カナがマキに言った。

「時間帯をずらして撮った、この小柄な男、理沙ちゃんの家へ空き巣に入った男の一人ではと、今調布署に画像を送った所、後他は自分には分からん写真ばかり、次郎も写真からでは良く分らないと言う、それで本庁一課の大泉警部を始め、関連所轄に写真をFAXしている。ヒットすればいいんだが」

と言いながらマキは、器用にパソコンを操作している。FAXを完了を見計らい次郎はカナに言った。

「どんな収穫があつたんだ教えてくれ」

次郎は四人掛けのテーブルに着きながら言う、マキも終わったと言いパソコンを止め席に着いた。まりがコーヒーを持ってくる、カナは一口飲んでから話し出した。

「大里麻衣、元は六本木は六階建てのビル昭和建設の社員、しかも社長の

大屋隆雄が紹介者で大里一成さんと結婚させた」

次郎の目が輝き大きくなった。

「結婚生活は世間並みと言うか、一般家庭並みと言うか変わらない。変わると言えば、一成さんは骨董品買い付けで、月の半分は外国に行っている、留守は使用人の牧田邦夫と二人で店を開けていた。親は三階に住んでいる、多忙な二人に代わって二人の小学生の面倒もみている。大里麻衣は一成さんがいるいないに関わらず、毎朝六時には掃除洗濯は無論、全員の食事を作る。アルコールが好きとみえ、夜出かけてもいた、帰宅は日付が変わったとしても、朝六時にはいつもの日課を熟す。一成さんは言う、良くできた嫁さんですと」

「毒殺されるような気配は、微塵んも感じられなかったか」

「自分には、それらしき気配はなかった。それから夜出かけていた店を聞いてきています」

と言いつつその部分を次郎に開いて見せた。マキも脇から手帖を見ていた、マキが知っている店があった。

「この店知っていると指さした」

無造作と書いてあった。

「有名な羊かん店の先の地下だよ」

とマキは言う。他に何かとカナを見た。

「今言ったような事が、今日の取材でした。でも次郎明日、麻衣さんのご両親がアンティークショップに来ます、同席の許可を貰いました。お昼に食事を兼ねてでしょうか、見えるそうです、明日また行ってきました」

「何か新情報が聞けると良いな」

自分も行っているいいかなとマキが言う。

「構わんと思うがカナはどうだな」

「自分は構いませんマキ一緒に、でも次郎、慣れん事もあるがスーツはどうも今一だ」

自分もそう思うとマキも言う、ピシッと決まっていると次郎が、言った。

「何時ものラフスタイルがいいよ」

とマキが次郎にやつかみ風に言う。

「それもこれも真実究明の為だ、二人ともスーツ姿だって決まっているじゃん、裸同然仕様は暫くはお休みや、慣れぬヒールにスラックス、マキ達には分からんとも言えるが端から見たら、サツサツと歩を進める容姿、さつきも言ったが決まってる、カナも分かってくれそろそろ、いっぷくにお客さんが来始まった。今日の捜査会議は終わりとしよう、用事がなければコーヒー飲んでゆっくりして行つて」

と次郎は二人に言い、パソコンを畳んだ。

マキとカナはアンティークショップの二階、応接室で大里麻衣の夫一成さんと親、恒夫さん洋子さん夫婦と相對していた。間もなく大久保さんご夫妻は来ると想われます、と一成さんが言う。

「先ずは私の両親を紹介しておきます、私の隣が父の恒夫で隣りが母の洋子です」

と一成さんが言う、両親は大里ですと礼をしながら言った。マキとカナも名刺を出し週間平成の記者です宜しくお願いします。と言い、ソファアか

ら軽く立ち上がり礼をする。恒夫さん夫婦は名刺何ぞない、恒夫、洋子と呼んで下さいと言った。

「昨日、麻衣さんの件はお聞きしました、他に何か自分達に言っておきたい事がありますか」

カナが恒夫さん洋子さんに向き直り尋ねた、二人は僅か考え込むようだったが、恒夫さんが口を開いた。

「息子たちの家庭は息子たちでと、聞かれたり頼まれ事は別だが、私らは息子たちの家庭には口出しせんだった。一成等は仕事を持ち日々忙しく動いている、二人の小学生たちは学校から帰ると私らの所に来、過ごす。帳の頃、夕飯を麻衣さんが作る。一緒の時もあったが、私らと子供たちと時間をずらして食事をし、麻衣さんが洗い物を終える、そんな毎日でした。店は午後七時迄でした、麻衣さんは本当に良く働くと言うか、良く動いてくれました」

「今回の件で何か気になるような事は無かったか」

マキが言う。

「友達と北海道旅行を計画していると、夕食時に私に言った。一つ返事で言いました、行つてらっしゃい。こっちでは桜咲くころだが北海道はまだ冬とも言える、寒さ対策を忘れんな、そんな私の言に喜んでいた。食事等家族の世話で、満足に休んだ事何ぞ、嘗ては無いに等しい。それは嬉しかったんだろう、日程は全て自分で決まっていた」

使用人の牧田さんが、

「大久保さんが見えました」

と声を掛けた。一成さんが立ち上がり応接室を出、こちらにどうぞと声が

した。

「お邪魔しますと大久保さん夫婦が入って来た。マキとカナが立ち上がり名刺を渡しながら村上真姫です、寺島加奈ですと其々に挨拶を交わす。自分達は週間平成専属の記者です、娘さん、麻衣さんの毒殺に疑問を抱いて調べ始めました、娘さんをなくし胸中察するところがありますが、真相究明にご協力をお願いします」

とマキが言った。大久保雄三さんは口を一文字に結び宙を見た。沈黙は続いたが雄三さんは口を開いた。

「人の一生に早い遅いは其々にある、だけれど娘は二十九の春に無くなった、早すぎると想う日々もある、ましてや毒殺とは、私達は些かどうしたもんか、娘は毒殺されなければならないような、犯罪絡みの一員だったのか、私達は娘を信じているが、今の所は否定も肯定出来ない」

隣で有紀さんが頷く様に、雄三さんの話を聞き入っている。

「マキさんカナさん、家内も協力すると言っている、真相を私も墓前に報告したい、なんでも話す何でも聞いてくれ」

早速ですがとマキは言い、聞き始めた。

「大里さんにも同様と想われる質問もあると思います、その場合はどちらでも構いません、お話下さい。先ずは麻衣さんの今日までをお話しできればと」

私から話しようかと恒夫さんがお茶を一口飲み話し出した。

「あれは高二の七月、食事の後の片付をなさいとか、部屋の掃除やら些細な事を私らに言われた。それが嫌になったか苦になったかで、家を出て行っ

てしまった。夏休みに入った日に搜索願を警察に届けた、が一向にヒットはしなかった。以前言っていた、渋谷センター街に屯しているのではと何度か行ったが見つからない。携帯電話料金請求書は毎月届くが番号を変えたか通じない、学校は止したか自分が支払っているのか、学費請求書は来ない。三年生となったと思われる三学期、突如母親有紀にメールが入った。一流とは言えないが大学に合格した、入学金並びに授業料を払ってくれるかと、有紀は久し振りの娘からの連絡で嬉しさ多分、すぐさま了解と打ち、送金先は今はどこにいるのと、後日送金先を連絡するでと、その日のメールは終わった」

「その後、送金先等娘さんから連絡はありましたか」
今度はカナが訪ねた。

「娘は父親と些細な事で家出してしまった。父親を出すより、母親の私が娘と連絡を取り合った方が良いじゃないか、そんな想いで父親へは私から話すだけにした。アカウントも分かり、いろいろ聞きたい事もあったが逆効果を考え、娘からのメールを待った」

「どこに住み、どんな生活をしていたか聞きました」

「後日、入学金の送金先と学費先を言って来ました、すぐさま送りました。入学式も終わったと思われる日、娘からお母さん渋谷でコーヒー飲まないで連絡が入った。すぐさま、はい分かりました何処で何時と打ち返しました」

「コーヒーを淹れてきました、こちらへんでお茶にしませんか」

と牧田さんが大盆で茶菓子と一緒に運んで来た。うおっ有難うございます

と恒夫さんを始め一同は礼を言う。

「ここ、大里さんは皆、私には親切そのものです。亡くなられた奥様は私の誕生日には必ず祝い品を、子ども達には誕生日はもとよりクリスマスやお正月にはプレゼントは欠かさず頂きました。私の家族は大里家の家族同然でした、そんな奥様が毒殺なんて、なんでそうなったのと日々想う次第です、記者さんどうか真相を究明してください」

立ちながら控えめに牧田さんは言った。骨董品の話やらカナの色黒とか世間話が続く。

「大久保さん、今日は麻衣さんの法要の打ち合わせに見えられたと聞いています、自分達の話ばかりでそちらの方は」

マキが大久保さんに聞いた。マキの不意な話に大久保さんは口をモグつかせ、手で制すかの如くしゃべる。

「それは既に、大里さんの方で段取りが出来ています、今日はその確認で来ております。後ほどそれを確認すればいいだけ、それよりも麻衣の方が気掛かりです。三十分ほど休憩しました麻衣のその後は」

と大久保さんは言った。

「では続きを始めましょう」

有紀さんは、体を起こし加減に座りなおし、話し出した。

「娘は、渋谷の109前に午前十一時と言って来た、人込みの中娘を探すことが出来るだろうか、そんな不安があった」

「自分もそこを使う、9の下とか目標物を更に詳しくしている」

カナが以前待ち合わせ人と、会うことが出来なかったと言う。

「その日が来ました、人でごった返している。娘を探せられるだろうか江戸しぐさ多分、時間だ娘はどこだ、人込みの中をウロチョロ、四月と言うのに汗がしたたり落ちる。そんな時、聞き慣れた声がした。

「お母さんご無沙汰しています」

と麻衣が現れた、辺り構わず夢中でハグした。

「お母さん皆が見ている、腕組んであげるからやめよう、コーヒーショップへ行こう」

「麻衣の成すがまま、コーヒーショップに向かいました」

マキが、有紀さんに向き直りしゃべりだした。

「そこはほんとに人は多いし、探すのは大変、良く麻衣さんを探すのが出来ましたね」

「娘の言うのには、若者の中で中年のおばさんを探すのは容易だった、と言
い、おまけに笑うんだもん、こっちは汗はかくし探すのに四苦八苦、全く娘
ったら」

「そう言われてみれば、娘さんの言う通りですね、若者の中で目立つかも」

「記者さんも、そんなこと言うんですか」

「つつ、失礼しました。コーヒーショップで娘さんと、どんな話をされました
か」

「センター街の一角で酎ハイ飲んでいたら、お嬢ちゃん今夜はここで寝るの
かい、風邪でもひいては困るだろう、付いてきなと恰幅の良い、それこそ中
年の男性が声かけて来た。行った先にこじんまりとしたアパートがあった、
重そうなドアを開けなかに、そこはエントランスホールになっていた。さらに

奥に共同の台所、ここはシェアハウスだった」

「麻衣に、そこで生活していたの聞いた、そしてその恰幅の良い男性は誰だったの」

「そう、僅かな光熱費だけで、ずっとそこで寝起きしていました。男性は大屋隆雄と言い、建設業不動産管理の昭和建設の社長さんでした。これから分かんが因みに、今日まで私には指一本触れていません」

「今どきの男性にしては珍しい人ですね、大抵はこの女は俺の女だと言うものだが」

「私には今後は、如何なるか分かんない」

有紀さんとマキの話は尚も続いた。

「そのシェアハウスは、何人位いたかどんな人達がいたか、と聞きました。

高校の学費や衣食住に関わるお金は」

「はい、麻衣の言うのには、一階は共同の台所と個別のシャワールームとトイレで、二階が個別の部屋になっていた。麻衣が入った時は二部屋空いていた、その一部屋を大屋隆雄はあてがってくれる、夜具は洗濯済みと言い気に入らなければ自分で持ち込めと、入居中の一人は大学生で二人は夜の商売と聞いた。他人に迷惑をかけるのはご法度、大屋隆雄さんが確認されたその時は、直ぐ退去だそうです。学費や小遣い等はコンビニでアルバイトで賄ったと言う」

「うーむ」

今度はカナが腕組みをおろし聞いた。

「入居者が夜の商売と大学生、分かんなくてもないがその人たちは何故に入居

しているのか、永くそこに居住しているのか」

「カナ記者さん、仰る通りです。私もそこが気になって聞いてみました。夜の商売の人は、居心地が合わんのか出入りが多かったと言っていた、大屋隆雄さんはその度、夜具を洗濯屋に出すのに忙しく動いていた。大学生は今までも何人かいた、今いる大学生も私と同じぐらいでここに来た、卒業までここに居て卒業と共に退去すると言っていた。それがここの慣習らしい、そんな訳で娘も卒業までここに居ると言っていた。今度はマキが聞き入る。

「大屋隆雄なる人物は、指一本触らんと言っていたが疑う様で申し訳ないが事実ですか」

「娘が言うのには事実としか言いようがありません。すれ違ったり会ったりした時は挨拶をし、学校はどうだねとかごく普通の会話で済んだと、就活をしていた時は行く所が無かったらわしの所、昭和建設に来んかへ、事務職があるよ、としばし言っていた。六本木で仕事ができる、最終的にはそんな訳で昭和建設に入社しました」

「居住地は如何されました」

「大学を卒業してから、渋谷近辺で給料で賄える、アパートを探しそこに引っ越ししました。五年間一緒に暮らしていた皆からも、お元気でねと掛け時計を頂きました。あのアパートは未だ私には如何なっているか分らず仕舞い、慈善事業とか分からんが、ただ同然で見知らぬ女性を探しては住まわせている、大屋隆雄さんに会って、お礼の一つで言うかと想えど、娘にコンタクトを頼んでもそれには及びませぬと、言うばかりで、未だかつてお会いし礼を言うってはいません」

マキが昭和建設に入社してから、今日までをわかる範囲でいいから聞かせて下さいと、大久保さん夫婦に向いて言う。

「私が出て口出ししては、麻衣が元に戻っては元もこうもない。母親、有紀に任せていた」

と雄三さんは有紀さんを見ながら言った。

「月に一、二回程度今日の出来事や元気でやっているメールが入っていた。又、渋谷のコーヒーショップで会う事もありました」

「入社後、何か変わったようなことはありませんでしたか」

「別段、これと言って気付いた事はありません、あるとすれば着るものが良くなったようでした、バックなんかも欧州の一流メーカーのマークが入っていた」

「そうするとごく自然体でしたね」

「だけど記者さん聞いて下さい、あれは入社二年の時だったかな、突如私結婚しますとメールしてきた。ビックリ仰天、私はメールだけではダメ、私に良く説明しなさいと言い返した。お父さんに言ったらほっほー良かったじゃないかだけでした」

「直ぐ麻衣さんに会いました」

「私が決めたんだ、ほっついてよ、と言いたげだったようだがそれから一週間後、渋谷の例のコーヒーショップで会いました」

「毎月の給料や賞与で懐が温かくなったか、着ている物が鮮やかになっていた、ネックレスや装飾品も増えている。そんな娘に相手はどんな人と真摯に尋ねた、私より十歳年上で小金井市で骨董店を営んでいる人、三階建て

で親と同居だが生活は別階、店番は必要だが使用人がいるのでお客様に挨拶程度。昭和建設の大屋さんの紹介と娘は言った」

マキとカナは瞬きもせず聞き入っている。

三階から着の身着のまま、ご両親の父恒夫さんと母洋子さんが降りて来た、いらつしやいと其々挨拶を交わした」

「私は骨董品を見る目はあるが女性に関してはからだらしない、早い話が見る目がない。だけど麻衣さんを一目見、この人は私の妻に間違いなし、そんな風に想った」

と一成さんは興奮気味にしゃべった。

「で、その場のその後は」

マキが聞いた。

「いいも悪いもない、両親の笑顔が目が、いい嫁さんだと言っている。店屋物だが良き結果になるように、皆でかつ丼を食した。大屋さんから聞いていると想いますが、私は高校時代家出をし、渋谷で路上生活をしていました。

そんな過去がありますと言うが過去は過去現在が重要やと受け流した」

一成さんは尚もしゃべる、各家庭其々です。

「別階とは言え両親と同居、時にはお客さんと相対せねば、店番やら伝票整理もあるは事実、だけど麻衣さんの時間は取ります、お約束します」

と言いここで初めて一成さんはコーヒーに口を付けた、その後も骨董品等雑談が続いた。

「その日は長居は無用と早めに切り上げた。帰路、娘は帳簿関係は何時も会社でやっている、店番はいらつしやいませと言い、分からない事は手伝い

のマキさんに聞けばいい、両親と同居は往々にしてある。そんな思いで渋谷のアパートに帰った」

「麻衣さんが帰った後、私の中から麻衣さんが消える事は無かった」

「暫くいや翌日も一成の表情は、一点を見つめるだけでした」

そう無口でいた父、恒夫さんが口をお開いた。

「いい方向に向いていますね、結婚はいつ」

とカナが聞く。

「三か月付き合って結婚しました、籍を入れるだけですけど。旅行は一成さんと買い付けに付き合って、ヨーロッパを回ってきました」

「有紀さんありがとうございました、良く話をまとめこれからの取材にもに使わせて頂きます」

「で、結婚後はどうだったか一成さんお聞かせください」

カナは手帳をめくりペンを持ち替えた。

そんな時、いっぶくに居る次郎のスマホが喚きだした。休憩時間よってやけに響く、ルパン三世が早く出ろと言っているよう、に五月蠅く感じる、スマホを見た次郎は週間平成の早乙女からだと言った、次郎だと出た。

「次郎さん早乙女です、偉い事が分かったよ、話が重複する所があるかもしれないが、聞いてくれ。」

簡単に言えば六本木のあのビルは悪の巣だ、先ずは四階の畠田智樹弁護士事務所、畠田弁護士は昭和建設の地上げを擁護している。根も葉もない言い掛かりを付けては、居住者を立ち退かせている。居住者は泣き寝入りが始ど、先にも言ったと思うが。昭和建設の入札なんてあつてないようなもの、

何所の建設業界で欲しがっている受注でも、いの一番に請け負っている、次郎さん可笑しいと想わんかい。それと昭和建設は密かにシャブの密売をしている、マトリさんが言うには、取引の情報が入るが取引現場に行ってみるともぬけの殻、どっかで情報が洩れている、悔しがる事頻りだ。五階六階の二瓶企画だが実態、今一だが不良債権とかの取立て、地上げ時の嫌がらせ等、噂だが聞いた。シャブの売買も聞く、このビルはビル事犯罪に染まっている。如何だい次郎さん、黒目が大きくなっただろう」

「ありがとう早乙女。良かったら志田やの魔王、飲んでいいぞ」

「そう、来なくっちゃーごっさん、又情報が入り次第連絡します」

で早乙女からの電話は終わった。次郎はスマホをプッシュした、マキですと声がした。

「マキ、いいか大里麻衣さんに関わる取材はカナに任せて、電話なのでと言

い失礼しますとその場から離れる」

「よっしゃー」

「なんだそのよっしゃーは」

「こうすると気が入んや、次郎ごめんなそんで部屋を出たよ」

「今、早乙女から情報が入った、昭和建設は地上げ屋だ、もう一つ裏の顔があるシャブの売買と大掛かりな取引が絡んでいる」

「シャブって覚せい剤」

「そうだ大麻の売買もある。言いかマキ、大里一成にそれと無く聞いてみてくれ、大久保有紀さんにも同様に、小さな袋に小分けしていると想う。今はそれらは無いかもしれない、小金井署が搜索しているんで、あれば小金井署

粕谷警部補が騒いでいると想うが、何の連絡も入っていない。ポチ袋に入れ受け渡しをしているとも、早乙女は言っていた。いいかマキ、練習は無し直本番だ頼んだぞ」

「よっしゃー」

と言い、マキはスマホを切り部屋に戻った。

カナがヨーロッパ新婚旅行を含め、骨董品の話を聞いている。飲み仲間はその様な人かと、カラオケのレパトリーはどの様だったとか。

「私には、今の曲は聞いても良く分らない、私の店もラジオをかけっ放し、しかしかかる曲は皆同じに聞こえてしまう、飲み仲間は十人程いた様だが、だれがどうだったか分からない。

店は居酒屋が五件ぐらいだったと想う、カラオケは三軒です、そのほかレストランとかコーヒーショップにも行っていたようです」

マキがソファアーに座り一成さんに聞いた、

「大里さんと大久保さんには、酷に聞こえるかもしれませんが、何分にも自分等は真相究明と麻衣さんの無念を晴らしたい、そんな一心で動いております。失礼な質問がありましたらご容赦下さい。麻衣さんは釧路空港駐車場で毒殺されたと報道されています。何故、毒されたか心当たりはないですか」

不意のマキの質問に一瞬、間が空いたが一成さんが口を開いた。

「今思えば可笑しな行動があったような、結婚当時から私には分からない程度で電話が入り、電話している様だった。時折麻衣の机の上に数種の封書が、又ポチ袋やそれと同等ののし袋が置いてあった。とっさに隠すでもなく躊躇もしない、私は気にも留めなかった、未だそれ等は何であったか私には分か

らない。記者さんそれらは小分けした薬物では」

「ありがとうございます、一成さんの仰る通りかも知れませんが、それが何所から手に入れて何処に流れたのかです」

薬物の授受は何時何処でその連絡方法は、マキは宙を見つめ思案顔。大里麻衣は飲みに出かける、居酒屋、カラオケボックス等々を思い浮かべていた。お茶にしようとコーヒートケーキを持ってきた。

「牧田さん、ありがとうございます喉が渴いていた所でした」

と一成さんが言う。皆は背伸びしたりトイレか部屋を出て行ったりしている。マキが皆に分らんよう次郎からの電話内容をカナに伝えた。カナは一瞬目を丸くする。全員がそろった所でカナが言った。

「もう少しお尋ねしたい事が、ご協力をお願いします、何分にも麻衣さんの真相究明ですお願いします」

「以前にも言ったかも知れませんが、この店では、それらしき事は無かったと想います、私も居るし牧田さんは毎日店に居ます、それらしき事があつたならば私達にも分る筈です。出かけた先々でと私は思います。居酒屋カラオケボックスでは、大勢出入りもあります。そこで小分けした薬物の取引は可能と想われますが、記者さんらは如何ですか」

大里恒夫さん夫婦と大久保雄三さん夫婦は、成り行きを見守る様に、頷くとも想われるような表情で、コーヒートを嗜んでいた。

カナが聞き入る。

「麻衣さんが立ち入ったと想われる店を、ご存じでしたら教えて下さい」

一成さんが記憶を辿るような仕草で吉祥寺が五店舗、三鷹が三店舗を話

してくれる。

カナは素早くそれらを控えた。

「ないと想いますが、電話帳とか住所録等はありませんか」

「ご存じと想いますが、小金井署が麻衣の所有物は殆ど持って行っている」

何か残っているかなと、一成さんは応接室を出て行った。その間を利用して大里恒夫さんが言い出した。

「ここ、大里家では良い嫁さんでした。どんなに帰りが遅くなろうと、翌朝六時には炊事洗濯を始める。当然わし等の分もだ、子ども達を学校に送り出すと、店の掃除や其々の部屋の掃除も、些かわし等の部屋は自分等でやるからと言った。店番は牧田さんも居るが、最近はお客様との相対も出来るまでになっていた。あつ牧田さん行っちゃったか、牧田さんも助かると頻りでした。麻衣さんは、一人でも店を開ける事も出来ると言っていました」

「お客様との相対出来るなんて素晴らしいに尽きます。私なんか骨董品の価値、ちんぷんかんぷんよ」

とカナが言った。

同じしてお待たせしましたと一成さんが入って来る。

「やっぱしこれと言った物は残っていない、小金井署が全て持って行つたと思う、けどこのコンデジは、麻衣のだけれど私の部屋に置いてあったので、無事だった様だ。飲み会等で撮ったものと想われる画像が、記録されている、記者さん見て下さい。フルネームは分からないがナオちゃん、クミちゃん、ヒロちゃん等写っている、記者さん見て下さい」

マキとカナはデジカメをスクロールしながら見始めた。

「五人全員だったり、個々だったり写っていますね。これは誰ですかこれを撮った店は」

と、カナが一成さんに尋ねた。

「それは吉祥寺のN店の物だと想われる、右からナオちゃん・・・です」

「このデジカメ貸してくれませんか」

「構いませんお持ちください」

「コピーしたらすぐお戻します」

カナは礼を言った。

ずっと口を真一文字にし聞き入っていた、大久保有紀さんが、うすら涙声で言い出す。

「うちの子に限って、そんな事は有りませんと世間では言うが、まさか麻衣が薬物売買、そして薬物で殺害された。そんな事があるか未だ信じられません。大学生から社会人にそして結婚、私はその頃の麻衣を知っています。又も言わせて頂きますがまさか麻衣がです。渋谷で出会った大屋隆雄なる人物、それと昭和建設、そこの辺で麻衣は、一般風な道から外れたように思える。記者さん真相究明をし、私達も含め麻衣の無念を晴らして下さい。なんでもお聞きください、知っている事は何でもお話します」

「お母さんありがとう、自分達流なれど、必要に応じて質問させて頂きます」

カナがぺこりと大久保有紀さんにした。今日の聞き取りは終わったかなとマキとカナは顔を見合わせ、テーブルのケーキを取り頂きます。

「麻衣さんの法事の打ち合わせと言うのに、長々とお邪魔させて頂きまして有難うございました。先も言いましたが自分等は、麻衣さんの真相究明を果たし、無念を果たす事にあります。今後もお話を聞かせて頂く事もあるかと想われます。その時は宜しくお願いします」

と言いまきとカナは大里家を後にした。

いっぷくの夜の部の開店には間がある、カーテンは下ろしてある。二階で休憩しているのか厨房にまりの姿は見えない、窓際のテーブルで次郎は、難しい顔をしながらPCと相対している。

ただいまとまきとカナが入って来た。次郎はお帰りと言い、その声では収穫ありだなと次郎は言った。

「大収穫と」まきが胸を反らして言う。

その仕草にカナは笑いを堪えた。

「まき、分かったよその仕草、終わりにして本題を話してくれんか、おっその前に電話では詳細にかけていた、早乙女が掴んだ情報を詳しく話そう。その椅子に座って」

次郎は早乙女の情報的事細かにまきとカナに言った。

「そうか睨んだ通り、昭和建設は薬物売買だったか、地上げ屋も代名詞のようだ。麻衣さんは何故に授受に携わっていたのか、又ポチ袋に入れてたとは」

まきは怪訝な顔して、カーテン越しに通りすがりな人々を見だす、カナが次郎に聞いた。

「マトリさんが、追っかけていたが麻衣さんは毒殺された。次郎、昭和建設は真っ黒、大屋隆雄も真っ黒。いつぞや言っていた大きな薬物取引にも携っ

ているんでは」

「同感だ、が今ん所攻めようがない。カナ達の掴んだ情報を聞かせてくれ」
マキとカナはメモを見、記憶を辿りる様に次郎に説明した。

「吉祥寺N店、取材の必要ありだ、ナオちゃん、写真に写っていたクミちゃん等々にも会う必要がある」

そう言いながら次郎は、麻衣さんのデジカメからコピーした、画像を一枚づつ丹念に見つめている、あつと声を発した。

「ヒロちゃんともう一人写っているこの写真、不鮮明だが後ろに写っている男性、こっちの画像にも写っている。女性グループと知らない中ではない、小生はそう見たが二人はどう思う」

「次郎の思い過ごしじゃー無い」

「そっぽを見ている様だが視線はカメラの方を見ている、小生の感と言うか満更、他人とは思えない」

「次郎がそう言うんだったら、取材の時に確認とってみよう、それにナオ、クミち、ヒロちゃん等々とも会う必要がある」

と、カナが言った。二人の毅然としたしゃべりに次郎は戸惑い気味だが、コーヒーを飲みながら言った。

「居酒屋のN店はパチンコ店員の誠一がいる、良く使っていると聞いた、N店長とコンタクトを取ってもらえる様に電話してみよう。あいつ、今空いているかな」

と言いガラケイをプッシュした。僅か間が空いたが次郎さんあつしだ誠一だよ、次郎さん何所へ行っておったんや心配したやぜ。元気な声聞いて安心

したや、所で今日は如何様な事で」

「今、とある事件で捜査中」

「おい来た次郎さん、あつしで出来る事は何なりと言って下さい。でどうすれば」

「誠一が出入りしている居酒屋のN店、その店長等に取材に行くからとコシタクトを取ってもらえんかな」

「なーんだそんな事か、お安い御用だ何時だ」

「誠一にあっちゃー敵わんな、まだ何時如何なる時はこれからや。間もなく帳で、店も忙しくなるだろう。今日止めるにして明日だ、明日午後一ではどうだ」

「よござんすよ、午後一時に店の前では」

「了解した」

「次郎さんじきじきのお出ましかえ、それとも何時ぞやの、滅法強へーお嬢さんかへ」

「滅法強へーお嬢さん二人で行く、分かっていると想うが体に触れんようにな、病院入りじゃー誠一も困るというもの」

「次郎さん分かったよ、そんなにあつしを責めといて、だけど次郎さんN店へは一緒に行っても構わんかい」

「誠一さえよければ構わんよ」

了解と言って電話は切れた。夜部の開店まで後三十分となった、今日の情報交換及び会議は早々にと、まりがお代わりと言いコーヒーを淹れきた。

「聞いた所、昭和建設と社長の大屋隆雄は明日にでも、取材をしなければな

らんだろう。又ポチ袋を利用した薬物の授受、もう一度一成さん等に会い、聞く必要がある。麻衣さんが北海道で会い、阿寒湖方面へ行った女性、或は男性だったかもは誰だったのか、釧路署へ確認も必要だ。麻衣さんとは関係あったか釧路港で爆発炎上、で健斗さんの射殺と続く。まだ、取材は始まったばかり、マキにカナ、本業を疎かにせず捜査に勤しんでくれ、頼んだぞ。その取材服も板について来たな」

二人は向き合い右手をパチンさせ、自分等に任せときなと言った、表情をする。

翌日午後、マキとカナは吉祥寺駅北口の待ち合わせの場所目指して、闊歩していた。程よい陽気だ、今日は上着はいらないと上着を小脇に抱えている、行き交う人の中には振り返る人もいる、立派とは言い難い胸を強調していた。待ち合わせのハンバーグ店が見えて来た、細田誠一さん確認できる。マキは手を振ったが一年振りだ、分からず仕舞いか応答なし。

近づき「誠一さん自分だよ」

と声を張り上げた。

振り向くもおやつと言った表情、マキは尚も近づきマキだと言った。

誠一の表情が崩れた、

「マキちゃんゴメン、様変わりして分かんなかったよ」

「取材の時は、何時もの露出仕様は次郎よりきついおっ達しがあった。この取材仕様、中々と言ったもんでしょ、でも中身は変わっていないよ。あつ紹介仕損じる所だった、立ったままではあるが紹介しておきます。昨年よりチームいづくく加わってくれた、元警視庁特殊隊寺島加奈さん、通称カナさん、

クロヒヨウと呼ぶ人もおる。誠一さん無断で触っちゃー遺憾でがな、柔道、空手は其々三段だよ、強烈な蹴りか投げ飛ばされるよ、要注意しときな。聞きたい事があれば合間に個々に聞いて、聞くのは一向に構わんよ、何故黒いとか、それと居酒屋では週間平成の記者と紹介してくれ、決してチームいっぷくであることは言わんで、誠一さん分かった」

「マキちゃん分かったよ、マキちゃんだって触れりゃー強烈な蹴りが、分かっています」

「で、時間を告げといった店に行こう」

誠一は二人を案内するが如くそそくさと歩き始めた。一、二分ここだと指さして地階へ。階段を下りた所に立派な木戸があった。誠一はドアを押して入った。いらつしやいと女性の声、賄さんの様だ、右手カウンターの中から、店長の茂久保渡ですと出て来た。

「ワタルと呼んで下さい、店長と言う呼び名は俺には好かん、店でもワタルと呼んでもらっている。皆さんもそう呼んで下さい」

「はい、自分達は週間平成の記者であり、村上真姫、寺島加奈でマキとカナです。そう呼んで下さい」

「テレビドラマに出てくるようなお二方、些か俺は紅潮気味、上手く答えられるかな」

誠一が笑いを堪えるが如く言った。

「ワタル、何言ってるんだい、いつもの調子でやれば良いんだ、コトちゃん、ユミちゃんと接してんだろう、その調子で答えればいいんだ、さあー開店時間までに終わらそう、マキとカナちゃん、ジャンジャン質問しとくれ」

じやーとカナがメモを手にし質問を始めた。

「大里麻衣さんが、釧路で毒殺されたのはご存じと想います。平成週刊は独自で真相究明を始めました。麻衣さんはどの位のペースでこちらに来ました」

「週一位だったかな、来ない週もあったと記憶している。二回見えた週もあった」

その時は一人でしたか、或いはグループでと聞いた。

「大抵、複数人だった、六人ぐらいの時もあったと記憶する、男性も一人時たまいたな」

男性と聞きカナとマキは一瞬、目が動いたがカナは質問を続ける。

「席の場はどうでした、和気あいあいと言うか、険悪な状態であったとか」
「俺の知っている限りは険悪状態は無かったと想う、コトちゃん達は何か気付いた」

仕込みやら、開店準備が終わったと見え、コトちゃんとユミちゃんはワタルさんの傍に座った。二人は記者さんのインタビュ―、一期一会とばかりにマキとカナに向き直った。

「俺は厨房に居る時が多い、客席は否お客さん情報は、この二人の方が詳しいと想う。コトちゃんとユミちゃん質問に答えてくれ」

ではと今度はマキが聞きだした。

「男性が入った時の場はどうでした」

「他の女性客とは余り話さず、麻衣さんと良く話していました。多分、麻衣さんの知り合いではなかったと想われます。男性客は他の女性にも声を掛け

て、グラスカチーンさせていた事も、場は険悪ムードは皆無と言っても言い過ぎではなかった」

コトちゃんが記憶を辿る様に言った。

「麻衣ちゃんの、飲みともグループの席、に誰か訪ねて来はせんだった」

あツと、ワタルさんがのりだして来る。

「麻衣ちゃんが居る時は、必ずと言っていいほど、麻衣ちゃん宛に電話が入っていた。その日に二人からも、コトちゃん達が忙しい時は厨房での手を休め電話に出ること暫し。終わると数分でグループに合流、麻衣ちゃんの隣の席に座る。グラスをカチンさせ十分位でジャー又ねと席を立った。コトちゃんユミちゃん分かんない」

ユミちゃんが言い出した。

「言われてみればそう言う事あったね、麻衣ちゃんグループが来ている時、一人は居ましたね、忙しいのか直ぐ帰ってしまう、私はその時そう想った」

更にユミちゃんは、記憶を辿るかのような顔をして言った。

「大人が小さな子に駄賃とか小遣いを渡す時、何て言うかな小さな袋、あっそうだポチ袋、麻衣さんからは絵柄付き、相手からは熨斗付きを授受、他の飲み仲間にに分からない様にやっていた」

マキとカナは身を乗り出すように聞き入っている。

「それは毎回だったか」

とマキが聞いた。

「私はここに来て二年になるが、数回あったかと記憶しています」

「ユミちゃんが数回あったと記憶されているが、おそらくポチ袋の受け渡し

は毎回だったと想う、コトちゃんは如何でしたか」

とカナが言うコトちゃんは宙を見た。

「言われてみれば自然、テーブルの下で何やらする仕草を見ました。それが何であつたかは、分らず仕舞いですが」

カナがコトちゃんにありがとうと言う。

「それと麻衣ちゃんと一緒にいた男性について、何か思い出すような事はな
いか」

とマキが聞いた。先輩格だろうコトが言う。

「いかにも反社会勢力風に見えた、だけど人前では笑顔は絶やさず、濁声は
発せず一般風で敬語紛い、私の方が口悪さは勝っている様な。二人だけで
来た事も数回見えています、仲睦まじく幸せいっぱいなカップルに、見えまし
た」

会話の内容は聞き取れなかったか、マキが聞いた。

「飲み物のお代わりや、乾きもんを持って行った時、会話は一時中断する事
も暫し、よって何を話していたかは不明、だけど時折難しい話か笑顔が消え
話すことも」

ユミちゃんは、どうでしたとマキは今度はユミに振った。

「麻衣ちゃんの後ろのテーブルに、お代わりを届けた時かすれ声程度聞こえ
た、次の取引はとか何時になるとか、その時はラインでとか言っていたよう
だが、了解と言いいい又、仲睦まじいカップルに変身していた」

マキとカナは気慣れぬスーツに、ここかしこに違和感が出て来たのか、肢
体をもぞもぞ、すみません、手足を伸ばさせてくださいと言い、立ち上がり

屈伸運動やら、ストレッチ風動きを始めた。ワタル店長がコーヒーのお代わりをとコトちゃんに言う。

マキとカナは落ち着いたか座りなおした。

「マキさんもカナさんもスーツが苦手と見受けしました」

ワタル店長が言うと、今度は誠一が二人を気にしつつ控えめに言い出す。

「お二方も取材時は別やが、普段は肌露出度多分なる出立ち、七月に入れば僅かな布切れを付けた程度、スカートは下手に座れば裾がたくしあがったり、短パンだって尻が出ていたり、真夏になったらどんな衣装になるんだろう。以前、どっかの知事さんが言っていた。裸同然で歩いていたら不審者に襲われた、何とかしてよ、そんなのあるかえ、ちゃんと衣服を身に付けろと言いたいと言っていた。その知事さんから、お叱りを受けるようなマキちゃんとかナちゃんの衣服バージョン、あつしは毎年が気になるところです」

「誠一さんそれ以上は言わないで」

「すまんです」と、誠一は素直に二人に謝る。

ワタル店長が割って入って来た。

「どんな出立ちだったかあつしも気になる、その頃とは言わず店にお出で下さい、コトちゃんVIPサービス券を持ってきて」

コトは洒落た封筒にVIPサービス券を五枚を入れて持ってくる。

「この券一枚で四人分、店にあるドリンクは無料です、オフ日にでもお越しください」

それを聞いていた誠一が心配顔で言った。

「店長、マキさんカナさんは酒豪と言うかボトル一本は軽いよ」

「誠一さん、あつしはこの店長だぜ、二言はないぜ、何だつたらその時、誠一さんも一緒のどうだい」

それを聞いた誠一は、返す言葉が見つからんのかポカーンとしていた。マキがサービス券を受け取った、近いうちのオフ日にお邪魔させていただきます、その時は宜しくと店長に言う、一同は其々に座りなおした。

「先にも言ったかも知れないが、麻衣さん達が飲んでいると必ず遅れてくる人がいた。その人と麻衣さんの二人は、揃ってトイレに入っていた時もあった」

ワタル店長は言う。

「その遅れてくる人達は、普段は店に良く来る人ですか、それとも麻衣さんが来た時だけ」

とカナが聞いた。

「普段は見かけた事は無い、コトちゃん達は見た事はない」

二人とも普段は見た事はないと言う。

「遅れて来てその人はどうでした」

「ソフトドリンクの人もいたが、焼酎の水割りが多かった様でした」

「最後まで一緒に飲んでいましたか」

「いや皆、途中で帰っていきました」

カナは壁に掛かった絵を見つめる。僅かに空きがあり、ユミちゃんが言い出した。

「麻衣さんと男性客の二人だけの時、私には同年代も同年代、それはそれは仲のいいカップルに見えました、出て行く時も二人べったり、その先は想像

しない事にしました」

マキはバックから写真を取り出した、例の六本木のビルに出入りする人が写っている写真だ。ワタル店長等に見せる。コトちゃんユミも頭をくつつけ合い見入る、突如コトちゃんが声をあげた。

「ねっねーユミこの人、こないだ例の男と一緒に来た人と違う、ユミ良く見て店長も」

コトは二人にかざした。

「そう言えばそうだなこの人、あれいつだったかな一か月前頃だったかな、例の男と来ていたな」

と店長とユミは相槌を打った。

「その時の状況を知っている限り教えて」

マキは三人に言　った。コトが言だす。

「その男は例の男と一緒に来て麻衣ちゃん達と合流、皆初対面なのか其々に会釈を交わしていました。これと言って他のグループと変りなく、良く飲み食べ、話に花を咲かせていた」

「その男の特徴は」

「年齢は二十代半ばだったかな、背丈は百六十センチ程で細身、ネクタイをし揃いの上下を着ていた、一見サラリーマン風だった。店長、ユミちゃんはどうかだった」

「ここの店はラフスタイルが、殆どの客層だから、背広にネクタイは目立たな、あつしは珍しいお客さんだと想っていた」

「ユミちゃんもその男に気付いた」

と、マキが聞いた。

「はい、気付きました。だけどその日限りのお客さんだったと、記憶します。お代わりをお持ちした時、これと言って難しい話はしていなかった、笑顔が絶えず世間話に花が咲いていました」

とユミは言った。

カナがオウム返しに聞いた。

「帰る時はどうでした、全員一緒か」

「はい、一緒に出て行きました。出てからはどうなったかは私には分かりませんが」

そうですねとカナは言った。

カナがユミちゃんに聞くと同じして、マキは次郎に電話した。勿論写真の男、麻衣ちゃんグループと一緒にいた男をだ。以前、菊田理紗さんの家へ小泉昭一と一緒に空き巣に入った男と類似している。電話を受けた次郎は直ぐさま調布署にその旨を伝えた。

次郎から電話を受けた調布署は、その男の写真を小泉昭一に見せてみると返って来た。カナは男の名はとかを、なおも聞き続ける。

「残念ながら名は言っていなかった、おいとかそのーとか言っているだけでした、でも男二人は他のメンバーは兎も角、麻衣ちゃんだけは名を呼んでいました」

「お二人はアルコールはいけるんでしょ、喉が渴いたでしょ、何だったら作りますよ」

とワタル店長は言う。マキとカナはぐつと堪え、ありがとうございます今は

取材中です。それは後日、プライベートで来ます、その時頂きます。今日はコーヒーで十分です」

マキとカナはぐつと堪えているのが、端からでも確認できる、誠一は下を向き、やけに肩が上下に揺れていた。店長が徐に言い出した。

「吉祥寺通りに面したビルの五階に、Nカラオケ店があります、そこもよく皆で行くような事を言っていた。言ってみたらどうですか、何か違った情報があるかもしれない」

と、渉店長は言った。

「そこの店長を知っている」と誠一が言う。

「誠一、顔が広いと言うか、パチンコ店でちゃんと仕事やっているの」

マキが誠一に言った。

「マキちゃん、あつしはね、日々の仕事をちゃんと熟しているからこそ、こうして他店情報が分かるんや」

「誠一、ごめん」

とマキが言った。

ワタル店長に向き直り、

「長々とお邪魔させて頂きました又、数多な情報を有難うございました。麻衣さんの真相究明に、一步も二歩も近づいたと想います。自分達は必ず麻衣さん毒殺を解明してみせます。誠一、Nカラオケ店に行ってみよう」

マキはカナを促し席を立った。

誠一は案内するか先を歩きだした。吉祥寺通り出て、あそこだと指さした。エレベーターで六階で、降りた所が、Nカラオケ店の入口になっていた。誠

一はさっさと入り受付嬢に一言二言、すぐさま手招きする。

「一〇一号室でお待ちくださいと言われた」

と誠一は言い、そそくさと廊下を進み、一〇一号室のドアを押し入った。数分、間があったが店長の梨本ですと、三十代半ばで長身の男性が入って来た。店長はマキとカナ見て、一瞬目を疑う様な素振りをし誠一に言った。

「こちらが記者さんかえ」

声が終わるのを待ってマキとカナは言う。

「自分等は週間平成の記者です、大里麻衣さん毒殺事件を調べています」

ご協力をお願いしますと言い、二人は名刺を店長に渡した。

「普段はこうして外に出ています、殆ど編集室にはおりません。用事があるときはデスクに伝言しといて頂ければ、こちらから電話出来るようになっていきます」

梨本店長は頷きながら言った。

「セイさん、このような美人の記者さんをどこでいつ、知り合いになったんだ」

誠一は僅か胸を反らした。早速ですとマキが切り出した。

「麻衣さんは良くこちらをどの位のペースで利用していました」

「月に一回程度だったかな」

「一人ですか複数人だったか」

「一人の時はなかった、その月によってまちまちだった、男連れとか二人三人連れだったと思う。大人数の時もあったな」

「大人数とは何人位でした」

「男一人と、女が五人の六人だったかな」

「だけど麻衣さん達が来ている時は必ず、店に電話が入り遅れてくる人がいた又、その人は十五分程度で先に帰ってしまおう。私には何だったか良く分らん」

「その遅れてくる人は男性ですか、女性でしたかまた、その時の状況は」
「女性です、男性は居なかった。その女性は他の人たちと違って笑顔は見せず、口を真一文字にしどこか緊張している様でした」

有難うございます、とカナが言い店長に聞き始める。

「その何人だったかな、あっそうだ六人の時は、ルーム内の雰囲気はどうでした」

「それはそれは三十半ばとは言え皆現役だ、今風な歌を代わるがわる合唱していた。アルコールもみんな強いと見え、ボトル三本は軽かった。帰る時だって皆シャツキツといていた、又来るよと握手して帰っていった」

「と言うことは、言い方が悪いかもしれんが、不審な動きは見受けなかった様でした」

「そうです、遅れてくる人を除いて皆、陽気でカラオケとアルコールを満喫していた」

「男は一人でした、その男はどうでした」

「デュエット専門でした、銀恋や麦畑等々良く歌っていた」

マキとカナは、質問に突っかかってしまう。

「でも記者さん、あれは三月上旬だった、この店に武蔵野署とマトリさんが来、捜査させて下さいと言って来た。麻衣さん達グループの部屋をだ」

マキとカナは身を乗り出して聞き入る。

「で、結末はどうなった」

「結局何も出ず仕舞い、マトリさん達は苦虫を噛み潰したよう顔して、どこかで捜査情報が漏れたとしか想われん、と言っていた」

「マトリさんと言えば見込みではなく、確かを持って踏み込む。それがかな振りとは、さぞかし無念に尽きるだろう」

「漏れたとは内部に精通するものがある、外部にマトリさんの動向を察知するものがある。そのどっちかだが」

とカナが言いルームの一角を見つめた。その時、麻衣さん等はどう対応していたか状況が分れば聞かせて」

カナは店長さんに問いした。

「所轄さんやらマトリさん等五人で搜索した。私にも立ち会ってくれと言われたので一緒にルームに入った。所持品を一か所に集め一つづつ複数人で確認、女性には婦警さんがボデータッチする、グループ内の女性には、なんで私がこんな目にとでも言いたげな表情、中にはおどおどする女性もいた」

「男客と麻衣さんはどうでした」

「調べるんだったら、気のすむようにどうぞと言った顔をしていた。結局何も出ない、捜査員はご協力を有難うございました、と皆に捜査終了を伝へルームを出て行きました」

捜査終了してから麻衣さん達は、

「ほれ見なさい何も出なかったじゃないの、と言った表情を浮かべていた。

その後は、何もなかったの如くカラオケを満喫していました」

「店長さんは、その搜索で何か気付いた事は、ありませんでした」
マキが言った。

「女性は突然の捜査に皆、目も虚ろ、我を忘れていた様だったが、麻衣さんは普段と変わりなく、さあ歌おうと皆に笑顔を振りまいていた」

うーむ、麻衣さんだけがと、マキとカナは顔を見合せた。

「梨本店長さん、今日はありがとうございました。何か想い出されましたら、週間平成に電話入れて下さい、自分達は日々取材に明け暮れ、編集室にはおりません、直ぐには電話に出られませんが、折り返し電話を入れることは出来ます」

とマキが言い名刺の電話番号を示した。

「はい、了解しました。記者さんのその制服と言うか上下のスーツ、決まっている、でもプライベートの装いも見たいもんだ、このロイヤルチケットは飲み物は無料、曲を含めルーム使用料は半額、ぜひお出で下さい」

「うわお、ありがとうございます」

「店長いいのかへ、二人はチョーが付くほど酒豪だぜ」

誠一が、マキとカナへ指を左右に動かしながら店長に言う。

「任しとき、俺はこの店長だ良かったらセイさんも一緒にどうだい」

「マキさんカナさん次第だ」

「誠一、遠慮する事ないよ一緒にどうぞ」

「よっしゃー、決まった待っています」

梨下店長はVサイン。

